

「天、共にあり —中村哲とアフガニスタン」

マタイによる福音書 1章23節

聖学院大学 人文学部チャプレン 柳田 洋夫

本日は、中村哲という人についてお話をしたいと思います。中村さんは、長年、アフガニスタンにおいて活動を続けてきました。そもそもは医師として、パキスタンでハンセン病治療に取り組んでいましたが、アフガニスタンへと活動を広げ、難民や、貧困に苦しむ人々の診療に携わるようになります。アフガニスタンといえば、2001年9月11日の、アメリカにおけるいわゆる同時多発テロ事件に関係する組織の本拠地とみなされ、激しい空爆と地上攻撃を受けた国ですが、同時に、2000年頃から厳しい干ばつに襲われた地域でもありました。豊かだった農地は砂漠となり、栄養失調と脱水で倒れる子どもたち、また、赤痢で亡くなる人が後を絶たないという状況になりました。水さえあれば救われたはずの命が空しく奪われていく様子を目の当たりにして、中村さんは、何よりもまず、人々の飢えと渴きを癒さなければならぬと考えました。そして、井戸掘り事業や、伝統的な地下水路カレーズの復旧を手がけました。2002年3月には、飲料水や農業用水の水源を大規模に開発することを目指した「緑の大地計画」を発表します。

そのような慌ただしい日々の中で、中村さんは、自らの家族のことで大きな苦難に遭遇します。2002年12月のことです。当時10歳であった彼の次男が、前の年に、脳腫瘍と宣告されていたのですが、それが急速に悪化しました。もともと脳神経の専門医であった中村さんは、もう死期は近いと直感して、急遽帰国して、自宅で最期まで看取することにしました。息子さんは、やがて関節痛で歩けなくなり、普通の鎮痛剤が効かなくなりました。普段は我慢強かった我が子が痛みで苦しんでいるのを見るに見かねて、なかなか入手できなかったサリドマイドを八方手を尽くして探したりもしました。息子さんが亡くなったのは12月27日の深夜でした。翌朝、ぼんやりと庭を眺めていると、冬枯れの木立の中に、一本だけ耀くような若い常緑樹(肉桂・につけい)が立っているのが眼に入りました。ちょうど息子さんが生まれた頃、野鳥がどこからか運んできた種が芽を出した記念の樹でした。常々、「お前と同じ歳だ」と言っていたのを思い出して、涙があふれてきた中村さんがもうひとつ思い起こすことがありました。それは、干ばつの中で母親が病気の我が子を抱きしめ、時には何日も歩いて診療所にたどりつく姿です。たいていは助かりませんでした。診察を待つ間に母親の胸の中で死んでゆくことも珍しくありませんでした。中村さんは、陽射しを浴びて立っているその樹を見つめながら、「見とれ、おまえの弔いはわしが命がけでやってやる」と決意しました。彼はまたこうも言っています。「空爆と飢餓で犠牲になった子の親たちの気持ちや、いっそう分かるようになった。人はしばしば自分でも説明しがたいものに衝き動かされる。・・・理不尽に肉親を殺された者が復讐に走るが如く、不条理に一矢報いることを改めて誓った。その後展開する新たな闘争は、このとき始まったのである」。新たな闘争とは何でしょうか。2003年3月、彼は現地事務所の職員を集めて重大発表をしました。「これ

までの我々の仕事は手初めにすぎない。今後、さらに大きな挑戦に乗り出すだろう。今、どれだけのアフガン人が故郷で安心して暮らせるだろうか。食べ物はなし、職はなし、カネはなし、水さえもないのだ。…干からびた大地を緑に変え、本当に実のある支援を我々は目指す。その大きな挑戦として、用水路を建設して豊かな故郷を取り戻す。…一致して協力し、復興の範を示すことが我々の使命である。これは、我々の武器なき戦である」。それは、かつてアフガニスタン政府が試みてなしえなかった国家事業への、一民間組織による無謀としか言いようのない挑戦でもありました。このようにして、中村さんの武器なき戦いは始まりました。

しかし、この時あったのは、「やるぞ」という気概だけだったと中村さんは後に振り返っています。土木のことにはまったくの専門外なので、川の流量計算や流路設計についての書物が理解できません。書かれてある数式を理解するために高校生の娘さんから数学の教科書を借りて勉強し直しました。中村さんの書いたものを読んでいると、土木関係ですから、今話題の「盛り土」などという言葉をはじめ、「法面」などの専門用語が当たり前のように出てくるのですが、最初はそのようなまったくゼロからのスタートだったわけです。しかし、多くの人の助けを得て、自らもいろいろな川を見て回りながら研究をはじめました。そして、江戸時代に故郷の筑後川でつくられた「山田堰」という用水路の取水口をヒントに、あえて伝統的な「斜め堰」「蛇籠」などの工法を採り入れることにしました。もちろん、その気になれば、世界で最も優れているといわれる日本の土木技術を活用することもできます。しかし、それでは逆に、壊れたときに現地の人たちがもう修理できないようなシロモノができあがってしまいます。また現地には、石を上手に切り出し、それをきれいに積みあげる古からの工法もありました。さらに中村さんは、護岸にヤナギやオリーブの樹を植えることを考えました。それは、たんに目を楽しませるだけでなく、長く伸びた根が護岸をがっちり守るといふ、やはり日本の昔ながらの知恵によるものでした。こうして、「マルワリード用水路」と名づけられたその用水路は、日本とアフガニスタンの伝統的知恵と技術を融合させながら、自然と人間とのコラボレーションを目指すものとなりました。中村さんは、自ら現場を指揮し、ブルドーザーで石を運びました。ところが、日本の河川とは比べ物にならない勢いの川を相手に悪戦苦闘を強いられました。いったんできた場所も、ちょっと大雨になるとたちまち決壊します。相手は自然だけではありません。現地ワーカーたちが、不慣れな環境や人間関係、また、厳しく先が見えない状況の中で、次々とやめていきました。さらに、中村さん自身が作業中に米軍のヘリコプターから敵と誤認されて機銃掃射を受けたこともありました。そのような想像を絶するさまざまな労苦については、ぜひ中村さんの著作を読んできたいと思います。

ついでながら、「ワーカー」というのは、要するにボランティアのことです。しかし、中村さんは、「ボランティア」という言葉は嫌いなので、あえて「現地ワーカー」と呼ぶのだと言います。そこにある彼の思いは、ひたすら「現地の人々の立場に立ち、現地の文化や価値観を尊重し、現地のために働くこと」でした。そうであるとき、日本からやってきた若者たちが、「よい体験をさせてもらいました」「よい思い出になりました」などと決まり文句のように言うのはなじめなかったと彼は言います。だから、「そんなセリフは止せ。君らのロマンや満足のために仕事があるのではない。ともかく結果を出せ」とあえて叱ったこともあったそうです。さらに中村さんはこうも言います。「私たちは何も思い出づくりや悟りを開くために生きているのではない。それは天から与えられた任務に忠実に、文字通り我を忘れて打ち込

んで必死で生きた後に、褒美として、結果的に得られるものである」。聖学院大学はボランティアに力を入れていますが、ちょっと考えさせられる言葉ではあります。

さて、マルワリード用水路は、2003年3月の着工から6年と5ヶ月を経て、2009年8月3日に開通しました。全長24キロメートル、実に3000ヘクタールの農地を回復し、さらに広大なガンベリ砂漠をも開拓するものでした。死の谷が豊かな緑地となりました。何万人もの人々の生活が回復されました。「百の診療所よりも一本の用水路」をスローガンに、中村さん自身すべてを犠牲にして取り組んだ事業でした。しかしまだまだ干ばつと貧困にあえぐ人々はアフガニスタンにいます。だから、中村さんの武器なき戦いは今なお続いています。

中村さんはまた、キリスト者でもあります。キリスト教学校である西南学院でキリスト教に出会い、また、内村鑑三の『後世への最大遺物』という本に衝撃を受けました。マタイによる福音書に記されているイエス・キリストのいわゆる「山上の教え」を暗記するほどに読んだそうです。そして、同じくマタイによる福音書に記されている本日の御言葉の「インマヌエル」、つまり「神は我々と共におられる」という言葉こそが聖書の神髄であると言います。本日の奨励題「天、共にあり」は、中村さんの著作のタイトルを拝借したものです。「天」とは、神についての東洋風の表現ですが、この言葉は、彼のこれまでの生き方あり方を実によく示すものでもあると思います。それはつまり、神が私たちと共におられるということを知ることができるのは、神から与えられた使命に忠実に生きることにおいてである、ということです。言い換えるならば、ひとすじに天命に生きる者こそが、「天、共にあり」という神の信実に触れることができるということです。そしてそのことは、苦難にもかかわらず、ではなく、まさに苦難を通してこそ与えられる恵みであって、中村さんはそのことを、自らの人生と事業を通して私たちに証しているのだと思います。

最後に、中村さんが著作に引用している旧約聖書詩編第23編のみ言葉をもって終わります。

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い魂を生き返らせてくださる。死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。命のある限り恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り生涯、そこにとどまるであろう。

2016年10月12日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)